

研究室から――

【東北芸術工科大学
エクステンションスクール】

教授 水鳥川 和夫



日本経済はこの十年苦境にあえいでいる。この原因は、結局日本の産業構造が新たな世界経済の現実に対応できていないということに尽きるであろう。これまで日本が得意としてきたモノづくりは、巨龍中国の台頭により大きな打撃を受けているが、製造業に代わる新たな産業はまだ見つかっていない。アメリカでは五年ほど前からITを中心として新たな産業が興り、新たな成長を始めた。これを主導したのは新たな企業であった。新しい技術を新しいやり方で行うためには、新規企業が必要だったのである。

人を育て、新しい企業も育てる

これまで大学は人を育ててきた。これからは人とともに新規企業をも育てていかなければならない。その小さな試みが東北芸術工科

大学エクステンションスクール・山形版MBA[※]である。

三年前の二年、山形県では地域経済の建て直しの一環としてリーダーとなる経営者を育成していく必要があるとし、そのために山形版MBAを構想していた。県はこれに関する検討委員会を設置することになり、私がかつたまたその委員となった。これが山形版MBAにかかわるようになった発端である。通常、MBAとはアメリカのビジネススクールで取得する学位で内容は企業経営の実践的カリキュラムとなっており、大企業の役員に

企業の育成へ

山形版MBA

なるための実務教育という性格が強い。これをそのまま導入したとしても、山形県内ではこれらの層は薄く、大学院の修士課程として継続的に採算ベースに乗せることは難しいであろう。そこで山形にふさわしい経営者教育とは何であるかというのが課題となった。

山形県が抱えている問題とは、冒頭に述べたようにわが国の基本的課題である産業構造の転換とそれを担う新たな企業が欠けていることにある。山形県は日本の典型ともいえない。山形版MBAとはまさにそのような起業や新規事業分野への転換をバックアップして

いくような教育であるべきであろう。

幸い東北芸術工科大学には、起業意欲をもった学生も少なからずいる。芸術系では、何かをやってみせて初めて認められるという風土があり、通常工学部卒業生が「製造業＝大企業志向」であるのと異なったマインドが形成されている。本学卒業生からはいくつかの企業が既に設立されてもいる。

在学中の学生から起業についての相談を受けることも多いが、何よりもやってみないと分からないというのが事業であるから、とにかくやってみるための手助けが必要である。これに対する支援というのはマン・ツー・マンのそれであろう。

山形版MBAはマン・ツー・マンの人的支援を行うために大学院とインキュベータ施設を併設したものとして構想された。今でこそ国立大学キャンパス内にインキュベータ施設が作られつつあるが、三年前の時点では国内には類例がなく極めて先進的な構想であった。

芸術の産業化を目指した「大学院」構想

このような内容の山形版MBA構想は、山形県の財政的支援を受けられるところまでいったが、結局大学側の諸般の事情から大学院としてのMBA設置は断念せざるを得なかった。一方、同時に申請していた経済産業省から「先導的企業家育成事業」の委託を受けられることになり、暫定版として今回のエクステンションスクールが発足したのである。ちなみに申請した「アート&ビジネス大学院」構想は、映画、ゲーム等「芸術の産業化」のための教育システムであり、評価委員

多数から、「これから日本はこれでいかなければならない」という高い評価を受けたと聞いている。

暫定版MBAとしては、新たな教員陣を確保できないため、自分でできるeビジネス分野で始めることとなった。プログラムの本身は、講義系と演習系の二本立てであり、演習は三つの段階に分かれている。第一段階では、受講生がそれぞれのビジネスアイデアを持ち寄り発表する。第二段階では、それらをグループングして、いくつかの共通するビジネスコンセプトをつくる。第三段階はそれぞれのグループごとにビジネスプランのブラッシュアップが行われ、最終回で投資家の講評を受ける。これらの段階に対応して適切な講義が用意される。

このようにして二一年度から手探りで



通迅サービスを試行するホテルのフロント

始まった暫定版MBA・エクステンションスクールであったが、受講生は順調に集まり、受講生からは、「役に立つ知識や刺激を受けた」、「大学の教員との関係ができた」、「異業種による付き合いができた」などおおむね好評であった。

受講期間終了後も起業や業種転換の意欲のあるグループに対して、フォローアップを行った。この際に最も障害となったのは、起業前の支援策である。事業化に踏み切るためには技術検証や市場調査が必要であり、そのためには実際にサイトを構築したり、サンプルを作ったりすることが必要であるが、これらに対してはほとんど助成策がないのである。

ホテルで通迅サービス

第二期エクステンションスクールは、山形県などの支援を受けて二一年六月から開講されたが、今回は玉田助教教授による商品開発コースを新設して製造業系にも対応を試みた。また、受講期間中に技術検証や市場調査なども積極的に行うようにした。現在、上山の旅館古窯、NTTドコモ東北、中国からの留学生ハストヤさんなどの協力を得て、ホテルに来る外国人客の質問等にFOMA^{注2}をもった通迅がどこでも対応するサービスの試行を行っている。

暫定版MBAが今後とも持続していくためには、多くの課題がある。第一に資金である。本事業は受講料収入のみによっては成立しないために、行政や地元企業からの継続的支援が必要である。第二に需要である。山形県内では起業や事業開発の意欲ある人々の種が尽

き、受講希望者が減少していく可能性もある。これにはひとえに一件でも二件でも成功例をつくりだしていくことが肝要であり、そのためには実質半年間では不足で二年構成が適当と考えつつある。第三に供給側である。本業務は大学の本来業務として位置づけられていないため、講義・演習のコマ数にカウントされず、業績評価の対象にもならない。教員側の取り組み意欲をどう持続させていくのかも今後の課題である。

以上、課題は山積しているものの、この道が成功への道であると信じて歩いてみたいと思っている。

注1 山形版MBA (Master of Business Administration = 経営学修士) = ビジスマインドを持った人材育成を

注2 FOMA = Freedom Of Mobile multimedia Access

注3 第三世代移動通迅サービスの総称

水鳥川 和夫 (みどりかわ・かずお)

東北芸術工科大学デザイン工学部未来デザイン学系教授。
千葉市美浜区真砂 3-17-4-1002。
コンサルタントとして都市情報化政策の立案に携わり、埼玉SKIPシティ、さいたまタワー構想などの都市情報化プロジェクトを立案・推進、現在は情報産業政策論、インターネット・ビジネス論が専門。
1950年 千葉県生まれ。
1972年 東京大学工学部都市工学科卒。
1980年 株式会社計画研究所コスモプラン設立、同代表。
1991年 東京大学より工学博士取得。
1993年 東北芸術工科大学教授。
2000年 (株)デジタル・イメージ設立、CEO就任。